

# 悲観主義とは「確実な賭けをすること」である トマス・ハーディのA Laodicean における金融資本 主義時代の倫理学

著者	原 雅樹
雑誌名	試論
巻	54
ページ	37-53
発行年	2021-01-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00131828">http://hdl.handle.net/10097/00131828</a>

## 悲観主義とは「確実な賭けをすること」である —トマス・ハーディの *A Laodicean* における金融資本主義時代の倫理学—

原 雅樹

### 序論

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) は、人間が自らの幸福を実現しようとするも運命に翻弄されて挫折し苦悶する様子を、多くの著作において描いている。それゆえ、ヴィクトリア時代以来非常にしばしば言われてきたように、ハーディに悲観主義的なところがあるのは間違いない。だが、現在広く支持されている見解によれば、彼の悲観主義は人間の努力による世界の改善を信じる改善主義と表裏一体をなしている。この見解は彼自身の主張に基づいている。たとえば、彼は自伝の中で自身の悲観主義について、“My motto is, first correctly diagnose the complaint—in this case human ills—and ascertain the cause: then set about finding a remedy if one exists” (*The Life and Work of Thomas Hardy* 413) と説明している。彼にとって悲観は西洋医学における治療の第一段階としての診断に類比的なものなのだ<sup>1</sup>。彼は、1901年2月に劇作家で批評家のウィリアム・アーチャー (William Archer) から受けたインタビューにおいて、自身のこうした思想的立場を “meliorist” (Archer 46) という語で言い表している。彼にとって、人間が悲劇的運命によって翻弄される最悪な状況を描き出すことは、そうした状況の改善へ向けた第一段階なのだ。

ハーディを “pessimistic meliorist” (Millgate 378) として見なすことにはたしかに説得力がある。だがその一方で、彼自身による悲観主義の説明の中には、診断の隠喩を核とする上記のような解釈にうまく収まらないものがある。

January 1, 1902—A Pessimist's apology. Pessimism (or rather what is called such) is, in brief, playing the sure game. You cannot lose at it; you may gain. It is the only view of life in which you can never be disappointed. Having reckoned what to do in the worst possible circumstances, when better arise, as they may, life becomes child's play. (*The Life and Work of Thomas Hardy* 333-334)

この「悲観主義者の弁明」(“A Pessimist's apology”) (以下「弁明」と略記)の中身は、最悪な状況に陥ることを前提としておくことによって人は失望せずに楽に生きられる、というふうにさしあたり要約できる。だとすれば、これは、悲観が人生をより楽なものへと改善する、という悲観主義的改善主義者による、ありがちな人生訓にすぎないように見える。しかし実際には、この一節の本質は、そのような要約から抜け落ちてしまう“game”という比喩の解釈なしには捉えられないと思われる。彼の諸作品の核心が運命の観念であるということは、批評史上繰り返し語られてきた。まさにその観念と密接に関連しているのが“game”の語——金品を賭けた偶然的な遊戯、すなわち賭博を意味する語——なのである。彼の運命についての観念は、ジリアン・ビア (Gillian Beer) の『ダーウィンの衝撃』(*Darwin's Plots*) 以後現在に至るまで、種の偶然的な進化を唱えるチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の議論との関連で理解されることが多かった<sup>2</sup>。たしかにビアが論じるとおり、彼の運命観は、あらゆる事象に何らかの原因があるとする決定論のように思えるが、実際には反対に、因果性を欠いた事象の存在を認める偶然論の一種だといえる。しかしながら、ビアが見落としているのは、彼にとって偶然的な観念が進化論よりもむしろ賭博のイメージと直接的に結びついていることである。彼の多くの小説の物語は、文字通りの賭博や、あるいは賭博にたとえられる登場人物の行為によって、偶然的に展開するのである<sup>3</sup>。

したがって、本稿では、ハーディ作品のキーワードである賭博の意味を吟味したうえで「弁明」を読むことによって、彼の悲観主義に潜む、改善主義とは異なる側面を浮き彫りにしたい。この目的は、意外なことに、彼の全作品中もっともマイナーなものの一つとされてきた『熱のない人』(*A Laodicean*) (1881) の分析によってこそ達成される<sup>4</sup>。そう考えられる理由は、以下の二つである。第一の理由は、全作品中、この小説ほど賭博描写が前景化される作品は他にないということである。その証拠に、ハーディの賭

博表象に注目するほぼすべての批評家たちがこの作品を主な議論の対象にしている。そして第二の理由は、リチャード・テイラー (Richard Taylor) が鋭く指摘するように、作品の主要登場人物の一人ウィリアム・ド・スタンシー大尉の人物描写に、「弁明」との照応関係が見られるということである (Richard Taylor 114)。

以下の本論では、賭博者として描写されるド・スタンシー大尉のキャラクター分析を正確におこなうために、第一節において、作中で賭博がいかに描写されているのかを明らかにすることから議論を開始する。ただし、あらかじめ強調しておきたいのは、最終的に浮かび上がってくるハーディの悲観主義が賭博の心得のようなものではまったくないということだ。第二節で論じるように、賭博を金融と不可分のものとして描くこの作品は、同時代のイギリスで繰り返し巻き起こった金融批判の議論との関連で読まれるべきだ<sup>5</sup>。ヴィクトリア時代は、20世紀初頭に本格化しはじめる“age of finance capitalism”の胚胎期としてみなされる (Franklin 51)。この時代には、一方で金融資本主義が諸制度として具現化されて社会に広く普及していったが、他方で金融行為は偶然に支配された賭博行為の一種としてみなされ、激しく非難され続けた。ハーディが作品の中心に据えているのは、この時代特有の道德主体性 (moral subjectivity) をめぐる問題である。その問題というのは、自由意志と責任とをその両輪とする近代的主体モデルの機能不全だ。最終節で論じるように、彼の悲観主義はその問題に対する一つの応答なのである。すなわち、それは、金融資本主義の時代において人が自由意志の制御の及ばない偶然に翻弄されながらもなお責任主体たりうるための、一種の方法論なのだ。このように、本稿は彼の悲観主義に潜む道德主体論の側面を明らかにすることになるだろう。

## 1. 賭博場のような物語世界

作中の賭博描写に注目する批評家たちの関心は、没落貴族ド・スタンシー大尉の私生児である賭博者デアに集中してきた<sup>6</sup>。デアは、主人公ではなく主要登場人物の一人にすぎないにもかかわらず、作品のメイン・プロットの展開を大きく左右する。メイン・プロットは、主人公の二人、ポーラ・パワーとジョージ・サマセットの恋愛から結婚へ至るまでの過程から成る。二人の恋愛関係は、鉄道王だった故ジョン・パワーの一人娘ポーラが、父親から相続したド・スタンシー城の改修工事を、たまたま知り合った駆け出しの建築士サマセットに依頼したことがきっかけで始まる。だが、二人

の恋物語は、ド・スタンシー大尉をそそのかして資産家のポーラと結婚させド・スタンシー城をド・スタンシー家の手に取り戻そうと画策する賭博者デアによって繰り返し妨害されるため、遅々として進展しない。たしかに、デアが秘密裏に進めてきたその企画は最終的に露見して失敗に終わる。だが、以下で論じるように、メイン・プロットは、その結末を迎えるまでにデアの企みによって侵食されてしまうのである。

重要なことに、デアはその企てを“game” (177) と呼んでいるが、その語は偶然の遊戯の一種である賭博の意味を色濃く帯びている。それはモンテ・カルロのカジノを描写する場面において繰り返し使われる語なのだ。その賭博場では、デアを含む“gamester”たちが、まるで“Gaming”の神によって魔法をかけられたかのごとく“gaming table”に我を忘れて群がり、“Chance”の気まぐれによって結果の決まるルーレットに熱狂する様子が展開する (249-250)。一見、デアだけは、偶然を確率計算によって制御しようとする合理的な賭博者であるかのように提示されている。賭博場において彼は、これまでにページが擦り切れるほど読んだ18世紀フランスの数学者であるアブラーム・ド・モアブル (Abraham de Moivre) の著作、『偶然論』 (*The Doctrine of Chances: a Method of Calculating the Probabilities of Events in Play*) を賭博指南書として用いながら、理性的に賭けに臨むかのように見える<sup>7</sup>。しかし実際には、負けが続き資金が底を突くと、彼は“mania for more money” (251) に駆られて理性を失うことになる。彼がいかに熱狂で我を忘れているのかということは、大尉とポーラを結婚させるというより重大な“game”における成功の可能性を、彼が危険にさらしてしまうことから見て取れるだろう。彼は、ポーラに会えると期待してイギリスからはるばるモンテ・カルロまでやってきた、大尉の恋敵のサマセットに対して、彼女の居場所に関する情報と引き換えに資金の融通を願い出してしまうのである。たしかに、結局のところその願いを断られた彼は、別の人物——この人物は、以下ですぐ述べるように、ポーラである——から得た資金を賭けて大金を獲得することになる。とはいえ、その勝利は、確率計算によって偶然の馴致に成功した結果ではなく、熱狂に駆られた末の偶然の産物にすぎない。作中で賭博は、人間の合理的思考とは無関係にその結果が決まる、偶然の遊戯として描かれているのだ。

このことは、デアが一種の賭博としてみなす、ド・スタンシー大尉をポーラと結婚させる計画にも当然当てはまる。そのことがよくわかる場面の一つを見てみよう。デアは、サマセットのポーラへの求愛を妨害するために、

サマセットの名前で彼女宛てにある電報を送る。その内容というのは、賭博場で負け続けたことを理由とする金の無心だ。デアの計略など知る由もない彼女は、当然、その電報がサマセットからのものだと思い込む。そして、それを読んでひどく動揺した彼女は、サマセットについての情報を得ようとして、賭博場で彼を見かけたというデアを呼び出すのである。デアは、このような事態をまったく想定していなかったため平静さを失い、計略が露見してしまうのではないかと不安に思いながらも、彼女の前に進み出て嘘をつきとおし、この難局をうまく乗り切る。だがその直後、彼がポケットからハンカチを取り出そうとしたときに、想定外のアクシデントが再び生じる。

By some chance a card came out with the handkerchief, and fluttered downwards. . . . It was neither a visiting card nor a playing card, but one bearing a photographic portrait of a peculiar nature. It was what Dare had characterised as his best joke of all. . . . However, once having seen the accident, he seemed resolved to take the current as it served, and, smiling imperceptibly, waited events with cheerful inanition. (280-281)

写真術に長けているデアは、計画成功のための秘策として、サマセットを泥酔状態に見えるように加工した捏造写真を準備していたのだが、それをたまたまここで落としてしまったのだ。その写真によって、たしかにデアはポーラのサマセットに対する評価を大幅に低下させることに成功する。とはいえ、その成功は予期せぬ事故によってもたらされたものでしかないのだ。

見落としてはならないのは、デアが計画を進めるにつれて、語り手が同様に賭博に関連する語彙を用いてサマセットのポーラへの求愛を描くようになってゆくことだ。サマセットは、自らの意図とは無関係に、ポーラを勝ち得ようとするデアのような賭博者の一人として描かれるのである。その典型例は、ヨーロッパ大陸旅行に出かけた彼女からほとんど音沙汰がないことに対するサマセットの心理描写に見られる。彼は、最初のうちは焦燥感に駆られながらもじっと耐えるが、再三の求愛に対する返事を保留されたこの“suspension” (242) あるいは“suspense” (247) について居ても立ってもいられなくなり、彼女に会うためにイギリスを立ちモンテ・カルロに向かってほとんど休みなく旅を続ける。注目すべきは、モンテ・カ

ルロの賭博場の異様な雰囲気を描写する際に、語り手が“high pressure of suspense” (249) という表現を用いていることだ。語り手は、サマセットを、賭博の結果を期待と不安の交錯した気持ちで待つ賭博者に見立てているわけだ。つまり、デアと同様に彼もまた、ポーラの獲得に人生を賭ける人物として描かれているのであり、したがって、彼が彼女と結婚するという結末は、彼がデアの賭博という妨害からついに解放されることによってではなく、まさにその賭博で偶然に勝利することによって成立するのである。

言い換えれば、これは、物語の結末が究極的には無根拠であり、それゆえ別の結末もありえたことを意味する。こうした別様可能性がもっとも際立つのは、逆説的なことに、物語を締めくくるはずのポーラの一言が放たれる瞬間だ。貴族階級のド・スタンシー家に憧れをもっていた彼女は、父親から爵位を引き継ぎ準男爵になった大尉と婚約していたが、結婚式当日の朝にデアの計略のいくつかを知るとすぐにその婚約を解消し、最終的にサマセットを夫として選ぶ。だが、物語の最後に、彼女は夫の目の前で“‘I wish you were a De Stancy!’” (379) と漏らし、夫がド・スタンシー家の人間ではないという現実をわかっているにもかかわらず、反実仮想にとらわれてしまう。なぜならば、大尉と結婚する前に彼女がデアの悪巧みを知ったのはまったくの偶然なのであり、それゆえ、彼女は、もしそのことを知らなければ、大尉と結婚して幸せになることもありえたからだ。彼女からの婚約解消を受け入れ静かに立ち去る大尉は“gambler seasoned in ill-luck” (343) にたとえられるが、このことはポーラの結婚相手が賭博のように偶然に決まったことを暗示しているといつてよい。

以上の議論が示しているのは、ハーディが物語全体を賭博に見立てて構成しているということだ。この作品において、いわば、物語世界全体は一つの巨大な賭博場として、そこにいる主要登場人物たちはみな賭博者として、それぞれ描かれているのである。だが、作中の賭博描写に関する分析は、実はこれだけでは十分とはいえない。というのも、作中では賭博が金融と不可分のものとして描かれているからである。次節では、この事実の意味を検討する。

## 2. 金融資本主義社会という賭博場

これまで見てきたように、ポーラとサマセットが結婚に至るまでの過程を提示するプロットは、デアが推し進める計画を提示するプロットと対立しているように見えて、実際にはその枠の中で展開している。デアの賭博



こそが物語全体に枠組を与えているのだ。興味深いことに、語り手は、他方で、そのデアの企みを“enterprise”(171)と呼び冒険的なビジネスとしてみなしている。たしかにデアの企画は、彼に加勢した建築士ハヴィルが、ド・スタンシー城の改修——ポーラはこれに10万ポンドもの大金を使うつもりである——の仕事を勝ち得えるためにサマセットと競い始める瞬間に、企業による経済活動の側面をもつことになる。そしてまさにこの瞬間に、デアとハヴィルの事業は金融業の世界と接点をもち、投資の対象となる。ハヴィルがデアに加勢した理由の一つは、別件である人物から受けた融資の返済に窮していたことだ。そこでデアは、その債権者にハヴィルが改修工事を請け負うことになったと嘘をつき、ハヴィルの借金の返済期限を延長してもらうことに成功する。言い換えれば、利益に目がくらんだ債権者は、デアとハヴィルを疑うことをせずに、彼らのたんなる“vision”(119)にすぎないものに投資することを選択してしまったのだ。このとき、デア、ハヴィル、そしてこの投資家のやっていることは、金融資本主義下のハイリスクなビジネスと見かけ上変わらないといってよく、だからこそ“enterprise”と表現されているのだろう。こうした空中楼阁の事業からなる企画の全体を、デアは“game”、つまり賭博と呼んでいるのだ。作中では、金融と賭博の密接な関係がほのめかされている。

このことは、ド・スタンシー城の所有者の変遷について語られる場面においてよりはっきりする。もともとド・スタンシー家によって所有されていたその城は、大尉の父であるサー・ウィリアム・ド・スタンシーの代にポーラの父の手に渡り、彼の死後、物語の現在である1870年代にポーラの所有物となった。というのも、サー・ウィリアムが、“visionary project of founding a watering-place”、“useless silver mine”、そして“racing speculation”に大金をつぎ込んだ結果、全財産を失ってしまったからだ(41-42)。サー・ウィリアムが最盛期には30頭もの競走馬を所有していたということから、ここで“racing speculation”という表現が意味しているのは競馬賭博であると考えられる<sup>8</sup>。ならば、ここで、リスクの高い冒険的な投資を意味する投機という語は賭博とほとんど同じ意味で使われているといえる。このことは、物語の現在においてサー・ウィリアムが初対面のサマセットに説く処世訓の内容によって裏付けられる。彼は新米建築士に年長者らしく何か助言を与えようとして、“Bank-returns”が“money-market”に与える影響や“current of speculation”における“Foreign stocks”の値動きなどといった金融に関する専門的な話から始めるのだけれども、最終的には人生におけ



る“luck”の重要性を力説し、“‘All I say is, discover your lucky star’” (38-40)と結論する。彼の考えでは、金融はそれ独自のメカニズムをもっているわけではなく、究極的には運に左右されるという点で賭博の一種なのだ。

このように、作中では賭博が金融と明確に区別されずに描かれている。こうした描写は一見奇妙で、その意味も不分明に思われる。だが、金融文化史研究が明らかにしてきたように、金融を賭博と不可分のものとしてみなすことは、実はヴィクトリア時代において通例的なことであった。この時代には、人々の生活がますます金融に依存していくようになった一方で、金融の賭博的性質を批判する議論が絶えず巻き起こっていたのだ。よく知られるように、イギリスでは、17世紀末から18世紀初頭の間に起こった財政革命以降、国家への信用である公信用を中心とした信用経済が、政治や社会のあり方に絶大な影響を与えるようになっていった。19世紀をその延長線上で捉えるならば、それはイギリスが金融分野においてかつてない成長を達成した時代である (Poovey ix)。この時代をつうじて、法廷通貨、信用証券、証券取引所、銀行、株式会社法、金融ジャーナリズムなどといった金融諸制度が互いに連動しながら大きく発展していった<sup>9</sup>。しかも、それらは、誰にもその全体像を把握することができないほど巨大で複雑なひとつのシステムとして機能するようになり、社会を覆っていったのだ (Poovey 1)。これによって、ますます社会の遊休資本の流動化が進んでゆき、その結果イギリスは“nation of shareholders”となった (Robb, *White-Collar Crime* 3)。19世紀の終わりまでに、約5分の2の国富が株式に投資され、多くの上・中流階級の人々が株主配当や各種利息で生計を立てていた (*White-Collar Crime* 181)。当然そこには女性も含まれるのであって、19世紀が進むにつれてますます多くの女性が金融市場に参入するようになっていった (Robb, “Ladies of the Ticker” 133)。しかしながら、その一方で、金融行為は、勤勉な労働なしで予測不可能な未来の利益獲得を目指す、不道徳で危険な行為としてみなされ続けた (James Taylor 53-89)。とりわけ、その結果を偶然に左右されやすい投機は賭博の一種としてみなされ、激しく非難され続けたのである<sup>10</sup>。もちろん、投機を確率論や統計学に基づく安全で道徳的な商行為として、賭博という偶然の遊戯から明確に区別することで、金融を擁護しようとする動きもあった。けれども、鉄道狂時代と呼ばれる1840年代の鉄道バブル崩壊のような、金融危機による社会混乱が断続的に繰り返される中で、“Anxieties about the infiltration of the commercial system by gambling” (Itzkowitz 144) が完全に解消されることは

なかった。金融批判の声が途絶えることはなかったのだ。

『熱のない人』における賭博表象は、まさにこの金融文化史的文脈との関連において捉えられるべきだ。ハーディが描こうとしているのは、賭博それ自体というよりもむしろ、そこで誰もが偶然に支配された賭博者のようになってしまう、金融資本主義の時代なのだ。この視点に立つとき、ポーラの見え方が大きく変わってくる。ポーラを狙う上述の男性キャラクターたちだけでなく、彼女自身もまた金融システムに覆われた社会における一人の賭博者として浮かび上がってくるのだ。鉄道王の娘で、父が興した鉄道会社の大株主の一人である彼女は、一見手堅い投資家のようなのである。だが、ポーラの父親は、1840年代の鉄道バブルの発生と崩壊という歴史的な文脈に関連づけてみれば、鉄道という冒険の事業の成功によってたまたま得をした者たちの一人ということになる。この印象は、サマセットが彼女の父親を称賛するときに用いる“the nobility of talent and enterprise” (96) という表現が、デアの“enterprise”と不気味に共鳴することによって、より強まるだろう。彼女の父親もまた賭博者として金融資本主義の時代を生きた人物なのだ。だとすれば、父親の偶然の成功の恩恵を株主配当というかたちで今なお受け続けているポーラもまた潜在的な賭博者にちがいない。

このように、金融をめぐる同時代の言論状況に関連づけてみれば、金融を賭博と不可分のものとして描くこの作品はひとまず金融批判の側に位置づけられるだろう。そのうえで言うべきは、その批判の具体的な内容を詳らかにすることだ。以下で見ていくように、ハーディは、金融資本主義を拒絶し、それが支配的になるよりも前の時代を懐古しながら、もはやそこへ戻れないことに絶望しているわけではない。そうではなく、彼は、行為主体性と責任をその両輪とする近代的道徳主体モデルが偶然に支配される金融資本主義社会において機能不全に陥りうることを問題視し、そのうえでド・スタンシー大尉の人物造形をつうじてその解決策を考えている。注目すべきは、本稿の最大の関心であるハーディの悲観主義が、その解決策に密接に関わっているということだ。次節では、彼の悲観主義が道徳主体論の側面を有していることが、最終的に明らかになるはずである。

### 3. 金融資本主義時代の倫理学

『熱のない人』においてハーディが問題視しているのは、個人が責任を負うのは自由意志で選んだ行為の結果に対してであるとする近代的道徳観が、金融資本主義時代においてうまく機能しなくなる可能性だ。この問題

意識は、ポーラの財産を狙うデアの賭博の顛末に注目することで見えてくる。デアは、彼の賭博的な企てにおいて、周到な計算に基づく策略の数々によって主体的に偶然を制御しようとするも逆に偶然に支配され続けて、最終的に運悪くサマセットに負けてしまう。すでに見たように、彼の密かな妨害工作のいくつかをたまたま知ったポーラは大尉との婚約を破棄し、サマセットを結婚相手として選ぶのだ。注目すべきことに、デアは大尉からこの結末を聞かされるが、自らの行いについて反省することはなく、ポーラとサマセットに謝罪することもない。それどころか、彼は新婚のポーラとサマセットの新居になる予定のド・スタンシー城に深夜に忍び込んで放火し全焼に至らしめ、どこかへ姿をくらますのだ。重要なのは、この放火を含む彼の悪事の全容を知る者が作中に誰一人おらず、彼が悪者として断罪されることのないまま物語が終わってしまうことである。彼の責任はいかなる仕方でも追及されない。物語は、一方で、彼を一貫して悪役として描きながら、他方で、ヴィクトリア時代の典型的な勸善懲惡の結末に至ることはないのである。だが、賭博が偶然によって左右されるものだとすれば、こうした物語の結末はある意味では至極当然だ。というのは、近代以降の支配的な道德観に厳密に従うならば、責任を帰すことができるのは個人が自由意志に基づいて選択した行為に限られるからだ。一般に、近代社会においては、ある人物が行為主体性、つまり自由意志に基づいて行為を選択する能力を有していない場合、その人物は責任をとりうる道德的人格をも持ちえない。ところで、第二節の終わりで述べたように、この作品をつうじてハーディは金融資本主義社会を彼なりの観点から特徴づけようとしている。彼の考えによれば、その社会では、生きることそれ自体が、自由意志の制御の及ばない偶然に支配された、賭博のようになってしまう。この視点に立てば、デアの放火行為からも偶然性を排することができなくなる。彼の放火行為の究極原因のように見える、放火しようという彼の意志そのものを、たまたま生じたものとしてみなすことが可能になってしまうのだ。そうであれば、ド・スタンシー城の全焼は偶然の出来事であって、彼はそれに責任を負うことはない、ということになりうる。こうして、読者は作者とともにデアの無責任性に直面することになる。このように、ハーディにとっての問題は、近代的道德主体モデルでは、金融資本主義が生み出すデアのような人物に対処できないということなのだ。

同様の議論は、ジル・ラーソン (Jil Larson) によってすでに提出されている。ラーソンは、『熱のない人』を含むハーディの諸作品において人生

を賭博にたとえる描写が多く見られることを指摘し、“This analogy between life and gambling reveals that. . . agency is always impure” (71) と述べる。つまり、ハーディは、誰もが偶然に支配された賭博者になってしまう時代において、完全に純粋な行為主体性を想定することはできないと考えているというのだ。こうしてラーソンは、偶然性を人生から排除できないということを踏まえて道徳を再考するという課題に直面した作家として、ハーディを捉える (139) <sup>11</sup>。しかし、ラーソンの想定とは異なり、彼はそこで止まっていない。彼は、近代的道徳主体性が金融資本主義によって機能不全に陥りうることを、デアの人物描写をつうじて明らかにしたうえで、それとは別の道徳主体性を、ド・スタンシー大尉の人物描写をつうじて提示しているのだ。

大尉が体现するのは、金融資本主義によってすべての行為が偶然に左右される賭けのようになってしまうことを認めたとえて、その行為の非意図的な結果に責任を負う道徳主体である。大尉は、結婚式の直前にたまたまデアの悪巧みを知っていきり立つポーラを見て、デアを必死に庇おうとするのだが、ポーラからなぜそのようなことをするのかと激した口調で問い詰められると、ついにデアが自分の隠し子であることを明かす。ポーラから婚約破棄を言い渡されると、大尉はこの結果を従容として受け入れ、彼女の部屋から出てゆく。ここで、語り手は彼を賭博者にたとえながら、以下のように描写する。

Sir William De Stancy left the room. It was noticeable throughout the interview that his manner had not been the manner of a man altogether taken by surprise. During the few preceding days his mood had been that of the gambler seasoned in ill-luck, who adopts pessimist surmises as a safe background to his most sanguine hopes. (343)

見落としてはならないのは、彼がデアとは決定的に異なる種類の賭博者として描かれていることだ。作中では両者ともに賭博者として描かれるが、両者のふるまい方は対照的なのである。大尉は自分の意志の制御を超えた偶然の結果に対して責任をとる。この行動は一見当然のこゝろのように思える。なぜならば、彼は、最初のうちデアの“game”に加わるのに反対し、加わった後にもデアの犯罪まがいの行為を強く非難していたとはいえ、ポーラに本心から恋をしてしまったために、デアからの協力の申し出を

はっきりと拒絶しなかったのだから。その意味で、彼をデアのたんなる操り人形としてではなく従犯者としてみなすことも可能だろう。しかし、たとえそうだとすると、彼もまた偶然に支配された賭博者なのだとすれば、この場面において、デアのように無責任な仕方ではポーラに対処することもできるはずなのだ。彼は従犯者なのだから、なおさらそうだろう。だとすれば、ここで彼がデアの“game”の偶然の結果を責任ある仕方では受け止めることは、子を思いやる父という立場からの行動という側面がそこにあるとしても、やはり注目に値する。大尉は、従来型の道徳的主体とは別のものを体現している。あらゆる行為が賭けのようになってしまう金融資本主義の時代において責任主体になるということは、逆説的なことに、偶然の制御をあきらめて賭けがもたらす結果を受け入れるということに他ならない——こうした道徳主体論を、大尉の描写に読み取ることができるのだ。

だが、この道徳主体は、何の支えもなく成り立つわけではない。大尉は、“pessimist surmises”によって生じうる最悪の結果を事前に思い描き受け入れる心の準備をしていたからこそ、婚約破棄という不運な偶然を受け入れることができたのだ。この「悲観主義者の推測」は、偶発的な事故の発生に備えるという点においては、たしかに保険によく似ている。だが、両者の間にある決定的な差異を見落としてはならない。保険をかける者は、いかに損害を減らせるか、いかに補償を受けられるかということに主な関心がある。保険とは偶然の飼ひ馴らしの方法の一つなのだ。対照的に、悲観主義者の大尉は、ポーラとの結婚がうまくいかない場合への具体的な備えを何一つしていない。こうした態度は、これまで賭けに負け続けてきたために今や負けることを前提として行動するようになってしまった、後ろ向きで投げやりな賭博者の諦念に由来するものではない。というのは、彼は、最初こそデアの巧みな誘導によって彼女に関心をもつようになったものの、すぐに自身の内側から湧き起こる恋心に駆られはじめ、それ以降はデアの意図とは無関係に彼女を振り向かせようと無我夢中で行動するからだ。その有様は、デアが自分自身をフランケンシュタイン博士に、大尉を博士が創り出したにもかかわらず制御不能になってしまった怪物に、それぞれたとえるほどである（170）。このように、大尉の悲観主義というのは、保険でも諦観でもなく、偶然に対して自分自身を開くための方法なのだ。

本稿は、ハーディが「弁明」において語る悲観主義に潜む、改善主義とは別の側面を浮かび上がらせるために、「弁明」と照応関係にある『熱くない人』の分析をおこなってきた。その結果明らかになったように、作中

で提示される悲観主義とは、あらゆる行為が賭博のようになってしまう金融資本主義の時代において、生じうる最悪の状況を悲観的に想定しておくことによって、偶然の結果を自ら引き受けて責任主体になるための方法なのである。この結果にもとづき「弁明」を読み直すとき、そこで語られているのが、まさにこの意味での悲観主義であるということが見えてくるだろう。“Pessimism (or rather what is called such) is, in brief, playing the sure game”という表現によってハーディが述べているのは、巨大な賭博場のような金融資本主義社会に生きる人は、悲観主義者の推測によって最悪の状況に陥ることを事前に想定しておけば、賭けの偶然の結果を引き受けられるようになる、ということだ。彼は、この悲観主義によって、人生が“child’s play”になるのだと結論する。この表現には「人生が楽になる」というたんに慣用的な意味のみならず、「人生が子供の遊びになる」という文字通りの意味もあるといってよい。そこには、悲観主義によって人は、利益を得るために偶然を制御するという達成不可能な試みをやめて、無邪気に遊ぶ子供のように偶然に対して受容的になることができる、という主張が込められている。悲観主義は、賭けを将来の不確実な利益への期待から切り離し、偶然に開かれた純粋な遊戯にする方法なのだ。もちろん、子供のように賭けをただ偶然の遊戯として享受することは、無責任になることではない。むしろそれこそが、偶然に支配された人が責任主体になることを可能にするのだ。こうして浮かび上がってきた悲観主義の思想は、人間の努力による世界の改善を信じる改善主義的なものではない。それは、行為主体性と責任からなる近代的道徳主体モデルに対してオルタナティブを提示する、金融資本主義時代の倫理学なのである。

## 結論

本稿は、賭博と悲観主義という二つのキーワードを共有する「弁明」と『熱のない人』を、金融の賭博性をめぐる同時代の議論と関連づけて相互参照的に読解することによって、従来の批評において改善主義と結びつけられるのが一般的だったハーディの悲観主義に、金融資本主義時代の倫理学とよぶべき側面があることを明らかにした。それは、巨大な賭博場のような社会の中で、最悪の事態が生じることを前提に生きることによって、自由意志の制御の及ばない偶然の出来事を受け取るための方法なのである。たしかに、それはハーディの悲観主義がもつ一側面にすぎない。『熱のない人』を1881年に出版して以降、ハーディは現在一般に彼の代表作とし



て見なされているいくつかの作品を生み出したが、たとえばそれらの中でもとくに有名な『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*) (1891) と『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*) (1895) に、金融資本主義時代の倫理学という側面をはっきりと見てとることは難しいだろう。ここで詳細に論じることにはできないが、これらの小説においては、本稿の序論で述べた改善主義の側面が強く打ち出されているように思われる。ハーディはテスやジュードが陥る窮状を描き出すことでその改善を訴えているように見える、ということだ。とはいえ、本稿が浮かび上がらせた側面は、ハーディの悲観主義にとって取るに足りない一過性のものでは決してない。『熱のない人』と 1902 年の日記の書き込みである「弁明」との間の照応関係がその証拠である。むろん、両者の間に約 20 年の時間的隔たりが横たわっている以上、その側面はハーディの悲観主義において持続的に現前していたわけではない。けれども、両者の間にある大きな共通性に着目するならば、「弁明」を『熱のない人』出版約 20 年後に書かれた註釈としてみなすことは十分に可能だ。ハーディがそれを書いたのは、約 20 年間重要だと思いつけながらはしっかりと描いてこなかった側面を強調しようとしたからかもしれないし、あるいは、その価値を再発見しあらためて言語化しようとしたからかもしれない。いずれにせよ、日記への書き込みの時点で、彼は自身の悲観主義におけるその重要性を認識していたはずだ。彼が『ジュード』を最後に小説の筆を折ってしまったために、改善主義の側面ばかりがどうしても目立ってしまうのだが、金融資本主義時代の倫理学という側面もまた彼の悲観主義を構成する無視しえない要素なのである。

## 注

本稿は日本ハーディ協会第 61 回大会および日本英文学会関西支部第 14 回大会における口頭発表に大幅な加筆・修正を加えたものである。また、この研究は科学研究費補助金の援助を受けたものの一部である。

<sup>1</sup> この著作はもともと、作者の二番目の妻である Florence Emily Hardy による伝記として、*The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891* (1928)、*The Later Years of Thomas Hardy, 1892-1928* (1930) という二冊で出版された。しかし実際には、この著作は、夫トマスが生涯にわたって書き溜めた種々のメモから成っている。フローレンスは彼の指示に厳密に従い、それらのメモを時系列に並べ直して伝記として出版したのだ。このことから、現在、この著作は三人称で書かれた自伝としてみなされている。本稿での引用は、Millgate が上記二冊をトマス・ハーディの自伝として一冊に編集し直したものに依拠している。



<sup>2</sup> ビア以前、ハーディの運命の観念については、Garwood が Arthur Schopenhauer の思想と、Bailey が Eduard Von Hartmann の思想と、Kramer がギリシア悲劇と、Sherman が産業革命以後の農村の窮状と、それぞれ関連づけて解釈してきた。

<sup>3</sup> たとえば、『帰郷』(*The Return of the Native*) (1878) の悲劇的物語はあるサイコロ賭博によって大きく展開する。あるいは、『森林地の人びと』(*Woodlanders*) (1887) において、登場人物たちの人生を決定づける悲劇的運命はサイコロの一振りにたとえられる。実は、ビアは、『ダーウィンのプロット』ではなく、“The Reader’s Wager: Lots, Sorts, and Futures”の中で、ハーディの小説、とりわけ『帰郷』における賭博表象について詳細に分析している。だが、やはりビアはそれを進化論の文脈で捉えようとしている。

<sup>4</sup> 『熱のない人』がハーディの小説の中でもっともマイナーなものとして位置づけられてきた経緯とその理由の分析については、Widdowson を参照。

<sup>5</sup> 金融を主題としたヴィクトリア朝小説はむしろ非常に多いのだが、金融という観点からこの時代の文学・文化が盛んに研究されるようになったのは、今世紀になってからである。こうした批評的潮流の変化については、O’Gorman および Henry and Schmitt を参照。

<sup>6</sup> こうした批評家の中では、19 世紀の賭博史を踏まえた上でこの作品を読む Flavin と、この作品の中にハーディ独自の貨幣の哲学を読み取ろうとする Ebbatson が重要である。

<sup>7</sup> ド・モアブルのこの著作は、作中では、“the book to bear the title ‘Moivre’s Doctrine of Chances’” (111) あるいは “Book of Chances” (121) と呼ばれている。この著作は、英語で書かれた初めての確率論の教科書としてみなされており、1718 年に出版された後、第二版が 1738 年に、第三版が 1756 年にそれぞれ出版された。ハーディを同時代の確率論との関りで解釈するものとしては、Small が有益である。ただし、そこで論じられているのは、『熱のない人』ではなく『帰郷』である。

<sup>8</sup> Flavin によれば、“Gambling and horse racing have always existed in a symbiotic relationship, and racing underwent a massive boom in the Victorian era. Between 1837 and 1869 the number of racehorses in England more than doubled” (40)。作品の物語の現在が 1870 年代に設定されていることを踏まえるならば、サー・ウィリアムはまさにこのブームを経験した人物として捉えられるだろう。

<sup>9</sup> プーヴィによれば、それらの金融諸制度の中には実は小説も含まれる。金融ジャーナリストと小説家の役割について、プーヴィは、“Making this system seem trustworthy—making it imaginatively visible—was the work of the journalists and novelists who wrote about financial matters” (3) と述べている。

<sup>10</sup> この点については Itzkowitz を参照。彼によれば、“Conventionally, Victorians viewed gambling and investment as lying at opposite ends of a continuum of financial risk, with speculation lying somewhere in between” (123)。ヴィクトリア時代の人々は、投資、投機そして賭博を不可分のものとして捉えていたのである。

<sup>11</sup> 本稿の議論にはラーソンのそれと大きく異なる点もある。ラーソンはハーディを “the traditional Christian belief that God does not play dice with his universe” に反対する “post-Darwinian freethinker” (139) として捉える。それに対して本稿は、前節で論じたように、ハーディを進化論ではなく金融資本主義について思考した作家として捉える。

## 引用文献

- Archer, William. *Real Conversations*. W. Heinemann, 1904.
- Bailey, J. O. *Thomas Hardy and the Cosmic Mind: A New Reading of The Dynasts*. U of North Carolina P, 1956.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. Routledge, 1983.
- . "The Reader's Wager: Lots, Sorts, and Futures." *Essays in Criticism*, vol. XXXX, no. 2, 1990, pp. 99-123.
- Ebbatson, Roger. "A Laodicean: Hardy and the Philosophy of Money." *Thomas Hardy and Contemporary Literary Studies*, edited by Tim Dolin and Peter Widdowson, Macmillan, 2004, pp. 80-98.
- Flavin, Michael. *Gambling in the Nineteenth-Century English Novel: 'A Leprosy is o'er the Land'*. Sussex Academic P, 2003.
- Franklin, J. Jeffrey. *Serious Play: The Cultural Form of the Nineteenth-Century Realist Novel*. U of Pennsylvania P, 1999.
- Garwood, Helen. *Thomas Hardy: An Illustration of the Philosophy of Schopenhauer*. John C. Winston Co., 1911.
- Hacking, Ian. *The Taming of Chance*. Cambridge UP, 1990.
- Hardy, Thomas. *A Laodicean*. Edited by John Schad, Penguin Books, 1997.
- . *The Life and Work of Thomas Hardy*. Edited by Michael Millgate, Macmillan, 1984.
- . *The Return of the Native*. Edited by Simon Gatrell, Oxford UP, 2005.
- . *The Woodlanders*. Edited by Patricia Ingham, Penguin Books, 1998.
- Henry, Nancy and Cannon Schmitt. "Introduction." *Victorian Investments: New Perspectives on Finance and Culture*, edited by Nancy Henry and Cannon Schmitt, Indiana UP, 2009.
- Itzkowitz, David C. "Fair Enterprise of Extravagant Speculation: Investment, Speculation, and Gambling in Victorian England." *Victorian Investments: New Perspectives on Finance and Culture*, edited by Nancy Henry and Cannon Schmitt, Indiana UP, 2009.
- Kramer, Dale. *Thomas Hardy: The Forms of Tragedy*. Palgrave, 1975.
- Larson, Jil. *Ethics and Narrative in the English Novel 1880-1914*. Cambridge UP, 2001.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. Oxford UP, 2004.
- O'Gorman, Francis. "Introduction." *Victorian Literature and Finance*, edited by Francis O'Gorman, Oxford UP, 2007.
- Poovey, Mary. "Introduction." *The Financial System in Nineteenth-Century Britain*, edited by Mary Poovey, Oxford UP, 2003.
- Robb, George. *White-Collar Crime in Modern England: Financial Fraud and Business Morality, 1845-1929*. Cambridge UP, 1992.
- . "Ladies of the Ticker: Women, Investment, and Fraud in England and America, 1850-1930." *Victorian Investments: New Perspectives on Finance and Culture*, edited by Nancy Henry and Cannon Schmitt, Indiana UP, 2009.
- Sherman, G. W. *The Pessimism of Thomas Hardy: A Social Study*. Fairleigh Dickinson UP, 1981.
- Small, Helen. "Chances Are: Henry Buckle, Thomas Hardy, and the Individual at Risk."

- Literature, Science, Psychoanalysis, 1830-1970: Essays in Honour of Gillian Beer*, edited by Helen Small, Oxford UP, 2003, pp. 64-85.
- Taylor, James. *Creating Capitalism: Joint-Stock Enterprise in British Politics and Culture, 1800-1870*. Royal Historical Society, 2006.
- Taylor, Richard H. *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels*. Palgrave, 1982.
- Widdowson, Peter. *On Thomas Hardy: Late Essays and Earlier*. Macmillan, 1998.